

☆四旬節第1主日(2月26日)の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (創世記 2章 7-9 3章 1-7 節)

主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいさせられた。

主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 5章12-19節)

皆さん、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。

律法が与えられる前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪と認められないわけです。しかし、アダムからモーセまでの間にも、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配しました。実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったのです。しかし、恵みの賜物は罪とは比較になりません。一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人

に豊かに注がれるのです。この賜物は、罪を犯した一人によってもたらされたようなものではありません。裁きの場合、一つの罪でも有罪の判決が下されますが、恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決が下されるからです。

一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。

福音朗読（マタイによる福音書 4章 1－11節）

そのとき、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある。」イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

まだ肌寒い日が残っています。皆様お変わりございませんか。教会の典礼は四旬節に入りました。主のご受難とご復活を迎える準備の季節です。今私たちに求められているのは「主に心に向けかえること、つまり回心です。また、それは自分のみに関心に向けることを意味するのではなく、隣人への愛を心がけることを意味しています。今の自分はどれほど隣人に関心を持っているでしょうか。どれだけ隣人の苦しみ悲しみに心に向け、その癒しに尽力しているでしょうか。今日私たちに向けられる神のことばに耳を傾け、実践しましょう。

第一朗読（創世記 2章 7-9 3章 1-7 節）

今日の回心の呼びかけは聖書の1ページ、創世記から取られています。聖書の冒頭から救いの歴史が始まっているのです。土から人を造られた神は人がご自分から離れてしまわないように願うのですが、人は自分を過信し神から離れてしまうのです。神から少しだけ離れてしまっても大丈夫だと思った人間は、その誘惑に負けて神から離れて死ぬことになるのです。この死とは身体的な死よりも重大な神から離れてしまうという死なのですが、最初の間は身体的な死を恐れるだけで、本当の死つまり神から離れてしまう道を選んでしまったのです。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 5章12-19節）

人祖アダムの子からの離反により人は罪の支配下に陥るわけですが、救い主イエスの神との和解へのその生涯のいけにえにより人は神との和解への道が開かれたのです。このイエスの働きにより、「恵みが働くときにはいかに多くの罪があっても、無罪の判決が下される」とパウロは述べて、イエスの御父への従順により人の救いの道が開かれたと述べています。人はどんなに大きな罪を犯したとしても主イエスへの信仰によって、回心の道が開かれるのです。御父は最後の一人に至るまで救いを諦めることはなさらないのです。

福音朗読（マタイによる福音書 4章 1-11 節）

イエスが四十日間の断食後に誘惑を受けられたことが述べられています。断食は「食べたい」という誘惑と戦うことですが、イエスはその誘惑に打ち勝った後にもう一つの誘惑に遭われたことが述べられています。すなわち霊的な誘惑です。神を試みること、そして主以外のものを神として拝むこと、つまり偶像崇拜です。私たちはどんな試練にあっても自暴自棄になつたり、神を呪ったりしてはならないのです。かえって神の慈しみに信頼して生き続けることが大事なのです。失望、絶望は神から離れてしまう罪です。イエスはそのことを教えるために誘惑を受けられ、どのようにしてその誘惑に打ち勝つかを教えてくださいました。イエスは聖書の言葉つまり神のことばを使って誘惑を撃退されています。聖書の言葉、神のことばは誘惑に対する優れた武器なのです。聖書を読むことは大事なことなのです。私の聖書の一押しは何でしょうか。



主イエスの受難（那須ベタニア修道女会聖堂）2021年8月

P.S.

春が足踏みしています。でも確実に春は訪れます。

カトリック足立教会

主任司祭 野口重光